

## 満州国皇帝の訪日宣詔記念館

民俗建築アーカイブ担当

## The memorial hall of Manchurian emperor swearing allegiance to Japanese God

## Editorial Committee

本学会前会長の佐藤重夫先生（以下敬称略）は約 150 件にのぼる建築を設計しているが、その多くは終戦の年に通信省をやめて郷里岡山に帰り、設計事務所を開設してからのものである。その作品は市役所庁舎、ホテル、学校、図書館などの大きなものから個人の住宅まで幅広くある。昭和 25 年に広島大学に赴任してから後の作品もいくつかあり、外国のコンペに応募したものや戦没者の慰霊碑など、対象は少し変わったものもあるが、佐藤の作風は歴史や風土を基底にした伝統を重視したものが多い。そのような多数の設計図を整理したとき、その中に異質のものを 2 件発見した。今でいう「帝冠様式」（帝冠併合式ともいう）の建築である。帝冠様式については後述するが、佐藤の建築作品を見ると、この 2 件を外すことは出来ない。まず 1 件は、『民俗建築』第 152 号の「民俗建築アーカイブ」で「<sup>ちやうこく</sup>肇国記念館建設計画の挫折」と題して取り上げたが、本稿では 2 件目の「<sup>せんしやう</sup>宣詔記念館」について述べるものである。時系列からいうと肇国記念館は昭和 12 年 11 月 1 日締め切りに応募した作品であり、宣詔記念館は昭和 11 年 12 月 25 日締め切りの応募作品であるから、この 1 年ほど後に肇国記念館を設計したことになる。どちらも佐藤が大学卒業後の渡辺仁建築工務所に勤務していた 24,5 歳のときの作品である。

さて、宣詔記念館とは何か、今の時代では意味がよく解らないテーマであるが、<sup>せんしやう</sup>宣詔とは <sup>みことのり</sup>詔 を <sup>の</sup>宣べ という意味である。これを説明するには当時の国際状況を見る必要がある。日本は内外の情勢が深刻に陥ったまま昭和を迎えた。世界恐慌が原因して輸出や国内の不況が続き、特に農村の困窮は深刻であった。この活路を中国大陸の開拓に求めようとした日本に対して、中国では反日民族運動が高まり、国権回復の動きが日本の満蒙進出を阻止し始めた。当時の政党内閣がとってきた協調外交と軍縮政策に対する軍部の反発が高まってゆき、中国大陸では軍部の暴発が懸念される空気に満ちていった時であった。満州に駐屯する日本軍（関東軍という）は、日貨排斥運動に直面して満蒙の危機が深まると、日本政府の方針を無視して武力による危機の解決を実行した。昭和 6 年（1931）9 月 18 日夜半、奉天郊外で満鉄線路を爆破し、これを中国軍の仕業だとして軍事行動を開始した。いわゆる満州事変である。軍部が描いた設計図は爆破の犯人を中国軍（張学良軍）になすり付けて、それに対する自衛権の拡大をねらい、さらに満州に独立国を建設して中国の反日対象から外す策略であった。満蒙は中国政府の及ぶところでないとする強引な計画に沿って関東軍は活動し始めた。当時、辛亥革命（1911～1912）によって滅亡した清朝最後の皇帝である <sup>あいしんかくらふぎ</sup>愛新覚羅溥儀（宣統帝、25 歳）が天津で中華民国の監視下に置かれていたが、昭和 6 年 11 月 8 日、関東軍の謀略によって溥儀を脱出させ、さらに政府の方針を無視して軍事行動を拡大し、満州の重要都市を次々と占拠した。そして昭和 7 年（1932、大同元年）3 月、溥儀を擁立して満州国を建国した。満州国は日本の傀儡国である。だから尚更、国を挙げて満州国の建設に取り組んだ。満州国の首都を長春に決め、新国家の首都にふさわしい名称

として「新京」と命名した。また、農村には開拓のため長野、山形、新潟など北陸、東北県から移民を募って定住させた。

さて、首都建設中の長春は南満州鉄道上の主要都市で、満鉄総裁後藤新平が沿線の開発に辣腕をふるっていたときであった。後藤は長春の都市計画の担当者として新潟県土木課長の加藤与之吉を推薦し、南満州鉄道の土木課長に招き、長春の都市計画に当たらせた。加藤は明治 27 年（1894）帝国大学工科大学土木工学科卒業であるが都市計画に手腕のある人であった。加藤は長春の駅前広場を中心にして放射状に道路が広がるヨーロッパ都市にみられるバロック都市の建設に尽くした。

さて、満州国建国当初、溥儀は執政に就任したが、2 年後の昭和 9 年に日本の承認を得て皇帝と称し、元号を康德とした。そして日本の天皇への忠誠を宣言するシナリオが作られていった。昭和 10 年 4 月 6 日、満州国皇帝溥儀は来日して天皇と会見した。そして皇帝は天照大神を奉祀すると定められ、宣詔した。即ち満州国皇帝は日本国天皇の祖神である天照大神を信奉し、日本国の傘下に入ることである。これを記念して満州国に建国神廟を建てあげようということであるが、国家は満州国の支配にこのことを利用し、訪日宣詔記念の建築を新京に建設しようと募集したのである。新京の安民広場の南に建設することになった。その設計は昭和 11 年 9 月に公募が発表された。佐藤はこの設計競技にすぐ取り組んだ。真っ先に描いた構想は当時盛んであった国威発揚色の濃い帝冠様式であった。帝冠様式とは鉄筋コンクリート造に伝統的な勾配屋根を載せる形で、多くは塔屋もついている様式である。今も残るこの様式としては神奈川県庁舎（1928）や名古屋市庁舎（1933）があるが、当時渡辺仁建築工務所ではこの様式の東京帝室博物館（東京国立博物館、1937）を建設中であった。この競技の審査結果は昭和 12 年 2 月 11 日に発表になったが、残念ながら佐藤は落選した。その内容は以下の通りである。

「満州国訪日宣詔記念建造物設計当選者発表 満州国宮内府内の訪日宣詔記念事業実行委員会では、予ねて宣詔記念建築物を計画、昭和 11 年 9 月設計図案の懸賞募集を発表し、12 月 25 日締め切りまでに集まった応募作品について審査の結果当選者を決定、2 月 11 日左の如く発表した。応募総数 274 通、その内訳は日本（内地および関東州）200、満州より 74（日人 67、満人 7）であった。一等（3000 円）新京 池田正巳、二等（2000 円）東京 大澤浩、三等（各 1000 円）新京 福地憲弘、同 石塚弥雄、選外佳作（各 200 円）5 名」

二等の大澤浩は渡辺建築工務所の同僚で、佐藤は大澤の入選祝賀会のことを日記に残していた。「夜は京橋京花にて大澤氏満州宣詔記念建物二等入選祝賀会あり、よく酔いたり」（3 月 15 日の日記）佐藤は大澤に図面の下書きを見せてもらい、多くのものを学んだ。しかしこの計画も終戦で実現せず、幻の建築に終わったが、佐藤はこれに取り組んだことが良い思い出としていつまでも記憶に残っていた。

## 参考文献

- (1) 独立行政法人 国立文化財機構 東京文化財研究所 ホームページ
- (2) 藤野保、他『日本史事典』朝倉書店、2003 年 4 月

「民俗建築アーカイブ」の写真・資料をご希望の方は下記へ申し込んで下さい。無料で提供します。

民俗建築アーカイブ担当 古川修文 [syu-bun@jcom.home.ne.jp](mailto:syu-bun@jcom.home.ne.jp)